

Windows11 26H2 にアップデートでどう変わる

<https://pc.watch.impress.co.jp/docs/topic/feature/2144347.html#c02>

Windows 11 Home/Pro のサポート期限は、25H2 が 2027 年 10 月 12 日となっているが、26H2 によって 2028 年 10 月 9 日まで延長される(Enterprise、Education は 2029 年 10 月 8 日)。このため、新機能が必要かそうでないか、という基準ではなく、Windows 11 を使い続けたい場合はアップデートすることをおすすめする。

特に 24H2 の Home および Pro は、2026 年 10 月 13 日にサポートが終了するので、25H2 または 26H2 への更新を早めに検討した方がいいだろう。

タスクバーを上・左・右にも配置可能



タスクバーを上に表示。左右にも配置できる

ユーザーインターフェイス関連で、最大のトピックといえるのはタスクバーの配置だ。

従来の Windows 11 では、タスクバーは基本的に画面下部へ固定されていた。PowerToys を使って上部にコマンドパレットのドックを表示することはできたが、タスクバー本体は基本的に位置を変更できなかった。

これに対して、26H2(厳密には 8 月のプレビューパッチ以降)では、「設定」の「個人用設定」－「タスクバー」－「タスクバーの動作」にある「タスクバーの位置」で、画面の上下左右にタスクバーを配置できる。

Windows 10 以前で左や右にタスクバーを置いていたユーザーにとっては、なつかしの機能が復活したことになる。ツールチップ、フライアウト、アニメーションなどもタスクバーの位置に合わせて自動調整され、どこに配置しても困らないようになっている。

ただ、検索ボックスと後述する小さいタスクバーは、現時点では上または下へ配置した場合のみサポートされる仕様だ。また、「タスクバーを自動的に隠す」設定も下部に表示している場合のみ可能となっている。下以外に配置するケースでは、一部の表示や操作に制限があることは覚えておこう。

小さいタスクバーも選択可能に

上に表示した状態で、さらにサイズを「小」に設定
タスクバー関連では、配置場所だけでなく、サイズを小さくする設定も追加された。

「タスクバーのサイズ」で「小」を選択すると、アイコンだけでなくタスクバー自体の高さも低くなる。画面の縦方向が限られる小型ノート PC など、わずかなが作業領域を広く確保できる。



スタートメニューの大きさと内容を変更可能

スタートメニュー「大」の表示

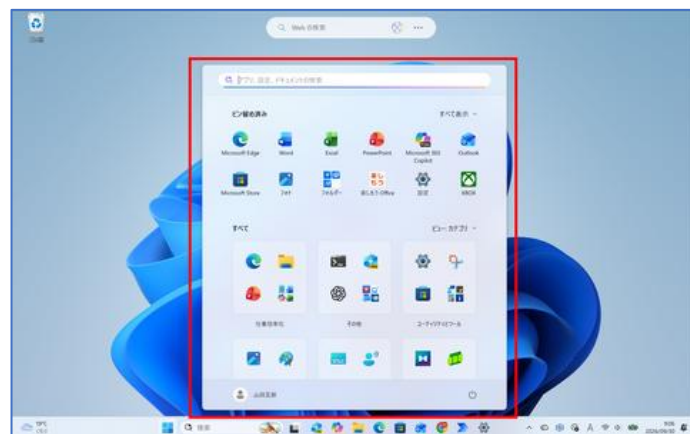
スタートメニューには、サイズと表示内容をカスタマイズできるようになった。サイズは「自動」「小」「大」から選択できる。ピン留めしたアプリを多く表示したい場合は「大」、画面を占有したくない場合は「小」といった使い分けが可能だ。

表示項目についても、「ピン留め」「新着順」「すべて」を個別に表示または非表示にできる。従来の「おすすめ」は「新着順」に変更され、アプリ、ファイル、ヒントなどの項目も設定可能になっている。



スタートメニュー「小」の表示。ちなみに筆者の環境では「自動(規定)」で「小」だった

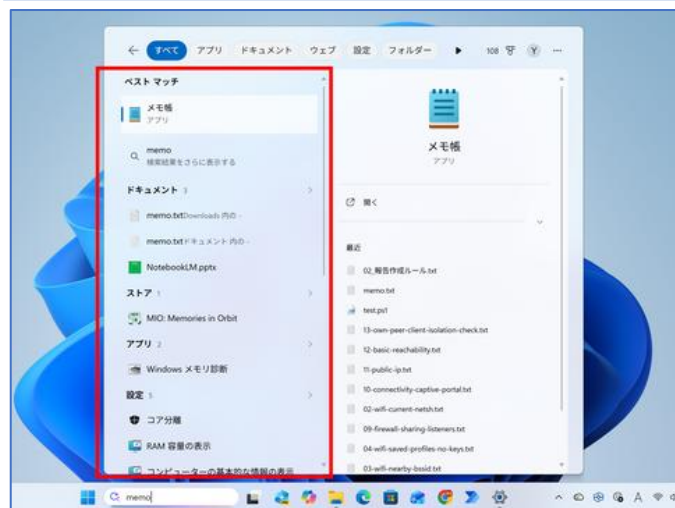
さらに、スタートメニュー内のユーザー名とプロフィール画像を非表示にする設定も追加された。画面共有やスクリーンショット撮影時にユーザー名を見せたくない場合に便利だろう。



Windows 検索は結果が分かりやすく

検索結果がカテゴリ分けされて見やすく表示される

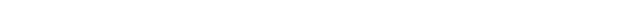
Windows 検索にも複数の改善が加えられた。検索結果には、「ベストマッチ」「ドキュメント」「アプリ」「設定」「Web の検索」など、結果の種類が分かりやすく表示される。スペルミスやアプリ名の一部だけを入力した場合も、インストール済みアプリを見つけやすくなった。

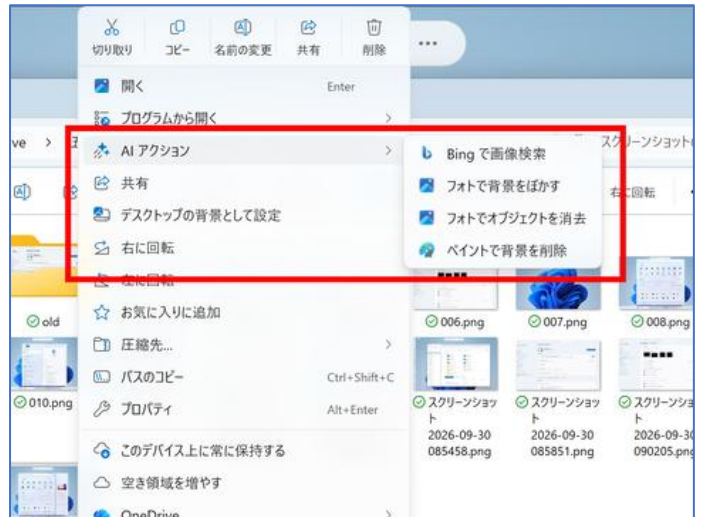


エクスプローラーから AI アクションを実行

「AI アクション」で検索や編集をすばやく実行できる
これも以前から使える機能なので新鮮さは少ない
が、エクスプローラーで画像などの対応するファイル
から AI 機能を直接呼び出せるようになっている。

JPEG や PNG などのファイルを右クリックすると、「Bing で画像検索」「フォトで背景をぼかす」「フォトでオブジェクトを消去」「ペイントで背景を削除」といった AI アクションが表示される。また、職場または学校アカウントでは、OneDrive や SharePoint に保存された対応文書の Copilot による要約なども可能だ。

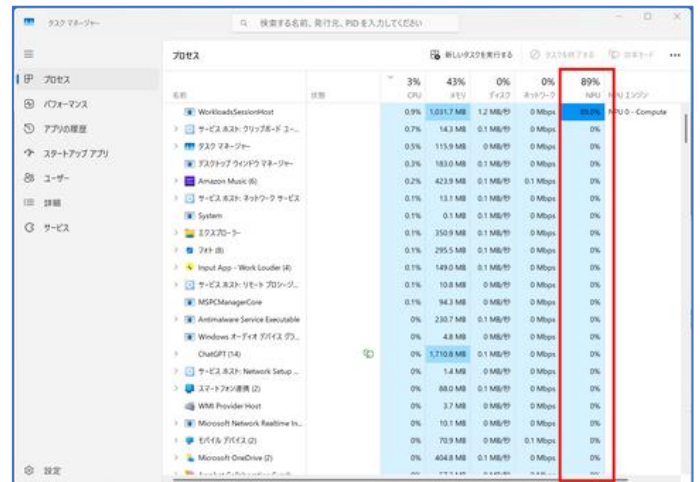
なお、ホーム画面の起動速度や応答性の改善も  26H2 の機能一覧に含まれている。いわれてみれば軽快になったようにも思えるが、ものすごく軽快か？ といわれると、正確には判断できない。



タスクマネージャーで NPU の使用状況を確認

NPU 列を追加することでプロセスごとの使用状況を確認できる

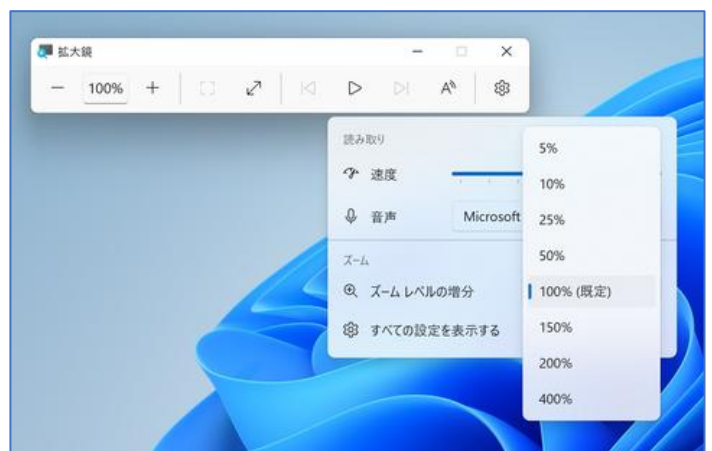
タスクマネージャーでは、AI 処理に使われる NPU の使用状況を確認しやすくなった。プロセス画面に NPU 列を追加することで、NPU 使用率が表示され、どのアプリが NPU を利用しているかを簡単に確認できる。



アクセシビリティ機能も拡充

ズームの倍率やスクリーンリーダー機能を追加

26H2では、拡大鏡、ナレーター、画面の濃淡、音声アクセスなどのアクセシビリティ機能も更新されている。



拡大鏡使用時に、「Ctrl+Alt+I」で色を変更できる。スクリーンショットなどは通常の配色のままで見た目だけが変わる

拡大鏡には、画面の色合いを変更して文字や画像を読みやすくする機能、より細かいズーム操作、スクリーンリーダーによる案内の改善が追加された。



セキュリティ機能

スマートアプリコントロールのオン/オフが容易になった

このほか、セキュリティ関連の機能として、管理作業が必要になったときだけ一時的な権限を与える「管理者保護」、システム上で発生したイベントを記録する「Sysmon」が搭載された。これらは標準では無効となっており、Intune などの管理者設定で有効化できる。

また、以前から搭載されていた「スマートアプリコントロール」が扱いやすくなった。信頼性の低いアプリや

悪意のある可能性があるアプリをブロックする機能だが、従来は、無効にしたあとに再び有効にするには、Windows のクリーンインストールやリセットが必要になる場合があった。

26H2 に含まれる新しい仕組みでは、Windows を再インストールすることなくオン/オフを切り替えられる。



指紋センサーの適用拡大

Windows Hello の Enhanced Sign-in Security(拡張サインインセキュリティ。リコールなどの機能で必要)は、従来は PC に内蔵された対応センサーのみが対象だったが、新たに外付けの対応指紋センサーを使うデスクトップ PC などでも、強化された生体認証を利用できるようになった。

すべての指紋センサーが対象になるわけではなく、Enhanced Sign-in Security に対応する機器が必要だが、エレコムなどから MoC(Match on Chip)方式の製品がリリースされている。

耐量子暗号とドライバセキュリティ

26H2 には、将来の量子コンピューターによる攻撃へ備える耐量子暗号関連の改善も含まれる。NIST で標準化された耐量子暗号の ML-KEM による鍵カプセル化と、ML-DSA による電子署名を扱う API が CNG(鍵の生成や暗号化、電子署名などの機能をアプリから利用するための Windows の暗号処理基盤)と.NETへ追加された。

回復機能

ポイントインタイムリストアやクイックマシンリカバリーが利用可能

これもすでに追加済みの機能だが、「ポイントインタイムリストア」によって、アプリ、設定、個人ファイルを含む PC の状態を最近自動作成された復元ポイントへ戻ることができるようになった。また、「クイックマシンリカバリー」で回復時に Windows Update 経由で対策パッチを適用することも可能になっている。



WMIC は削除済み

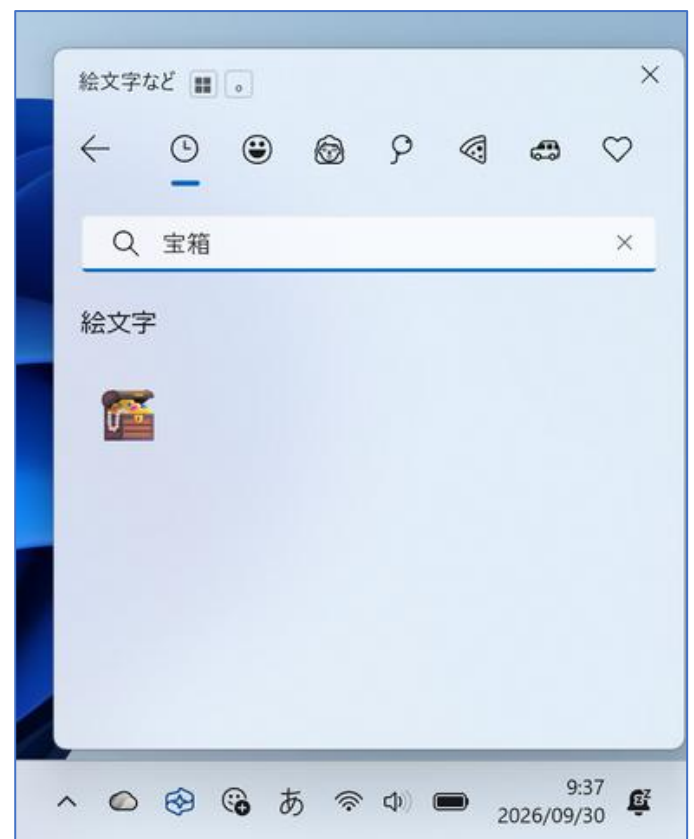
古くから Windows の管理に使われてきたコマンドラインツール「WMIC」は、24H2 以降の Windows 11 から削除された。新規インストール環境では以前から既定で無効になっていたが、2026 年 8 月以降は追加機能としてあとからインストールすることもできない。

なお、削除されるのは WMIC コマンドであり、基盤となる Windows Management Instrumentation 自体は引き続きサポートされる。

Emoji 17.0

17.0 で新たに追加された絵文字が利用できる

絵文字パネルで Emoji 17.0 がサポートされ、新しい絵文字が追加された。



Copilot キーのカスタマイズ

Copilot キーをカスタマイズ可能

Copilot キーを右 Ctrl キーまたはコンテキストメニューキーとして利用するよう割り当てを変更できるようになった。

ペイントやフォトなどのアプリは 26H2 とは別に更新

ペイント、Snipping Tool、メモ帳、フォト、クロックなどの Windows 標準アプリは、Windows 11 のバージョンとは別に Microsoft Store 経由で更新される。

このため、同じ 26H2 を使っていても、アプリのバー



ジョンによって画面や機能が異なる場合がある。ペイントのプロジェクトファイルや消しゴム透明度、メモ帳の Markdown 関連機能、フォトの新しいビューアーと SVG 表示、クロックの複数カウントダウンなどは、OS 本体の 26H2 ではなく標準アプリ側の更新だ。Microsoft Store で最新版に更新しておくといいたいだろう。

Windows 11 は今後も継続的に更新される

以上、26H2 の概要と、現状の「目新しい機能」について解説した。

見た目では、タスクバーのカスタマイズが大きいけど、ちょっと試したものの、個人的には「下」以外の配置が本当に便利なのかピンとこない。このあたりは好みの問題になりそうだ。

細かく拾えば変更点はかなり多いけど、それらが 26H2 の公開と同時に一斉に追加されたわけではなく、25H2 や 24H2 向けの月例更新で段階的に配信されてきた機能であり、厳密な意味での新機能は少ないことになる。

Windows 11 では、年 1 回の機能更新よりも、毎月の累積更新で新機能を届ける「継続的イノベーション」が中心になっている。今後も月の更新の適用によって、さまざまな機能が追加されていくと考えられる。

つまり、26H2 へ更新する意味は、サポート期限を延長し、この 1 年間に追加された機能をまとめて有効化することで、Windows 11 の「標準」状態へ手元の PC 環境を揃えるということになる。劇的なメリットがあるわけではないので、急ぐ必要はないけど、忘れずにアップデートしておくといいたいだろう。